

会長あいさつ

社団法人宮陵会 会長 狩野七郎



平成22年度をむかえて…「時代の転換点を感じます」

去る2月27日、平成22年事業年度の事業計画案と予算案をご承認賜わるべく、代議員会を開催いたしました。いずれも原案通り承認可決され、5月23日開催予定の通常総会に他の議案とともに付議されることになりました。

一昨年は神奈川大学も創立80周年の記念の年でありました。「質実剛健、積極進取」の人材を育成するという建学の精神をあらためて想い、宮陵会として大学への支援体制も一定の深度をふかめたものと存じます。これも一重に19万余に達する卒業生の母校に対する深いご理解とご協力なくして為せるものではありません。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

さて、リーマンショック以降の金融危機に直面し、わが国の経済は惨憺たる状況となりました。私事にわたり恐縮ですが、私は税理士として会計・税務の世界に身を置き、半世紀近くになりますが、われわれの身近にある中小企業の惨状は、今まで全く経験のない、想像をはるかに超えるものです。加えて急速な少子高齢化社会の現

象は、経済界のみならず、教育界への影響もなみなみならぬものが見えてきました。時代の転換であり、そこへの環境対応を推し進めなければなりません。今回の事業計画案、予算案において示した如く、奨学金制度の充実は、この目的に添ったものでもあります。

先日宮陵会に対し文部科学省の实地指導監査がありました。他大では見られない大学への支援体制が出来ており、相互の親睦のみになりがちな同窓会組織として宮陵会はお手本である、との大変なおほめの言葉を頂戴しました。こうしたなかで社団法人としての組織について、引き続き検討委員会を検討して頂いておりますが、公益的社団か普通の社団かを選択すべく、会員の声を集約しながら、これから1年を目標に努力します。

わが宮陵会は総合大学としてその多様な卒業生が全国津々浦々にたくさんおり、支部・ブロックとしてその組織化が進んでいます。しかしながら、現在の在学生の出身地域が神奈川、東京等関東地区及び静岡を含めると80%を超えて

おり、その他の地方出身者が極度に少なくなっています。宮陵会の将来像が憂慮される所以であります。

伊藤文保理事長もこの点を変えて、ご心配されており、本誌のNo.58において、正月の箱根駅伝について、卒業生の期待に応えたいとのご心境を述べられたあと、「いまひとつは、——宮陵会の皆さんなどのお力もお借りした、地方の学生の入学選抜制度“のようなことをシステムとして検討してみたいと思っています。”という力強いお言葉を賜っております。学長始め先生方にもご支援、ご指導をお願いしたいと思っております。

あのオバマ大統領は時代の転換点を察知して「Change」を叫び、こう言いました。「Yes We Can!」出来ることを着々と積み上げていきましょう。私達はできます。良い母校をつくるために、ぬくもりのある宮陵会を次世代につなぐために、一層の努力をお約束します。

理事長あいさつ

学校法人神奈川大学 理事長 伊藤文保



目の回るような慌しさ(気分として)のもと、理事長として二度目の春を迎えました。

学内はもとより、宮陵会の皆様の温かなご支援、ご協力のお陰で、大学運営もとりあえず大禍なく推進できましたこと、心よりお礼申し上げます。

◆ 昨年は9月に北海道(旭川市)、中国(岡山市)、10月には北陸(金沢市)、九州(北九州市)、11月に東北(八戸市)と各ブロック会議にお招きをいただきました。校友として機微に触れた交流ができた大変有意義な一刻(ひととき)でありました。今後ともこうした絆を大切にしていきたいと考えております。

◆ ただ、10月17日に行われた“箱根駅伝”予選会で、正月の本大会連続出場が途切れた、その後のブロック会議は、ひたすら「お詫び行脚」になってしまったこと、まことに申し訳なく思っております。

◆ そこでまず、陸上競技部の強化策についてであります。これまでの宮陵会、

本学の「将来構想」に一層のご理解とご協力を

後援会のご支援に寄りかかり気味の課外活動に対して、今回のショックを踏まえ、法人(経営側)として更なるテコ入れを図ることといたしました。陸上競技部(駅伝ブロック)に対する具体策としては、

①スカウティング活動の強化

国内東西にスカウティングアドバイザーを配置(4月)

②指導者の増員

現在の指導体制に加え、強化選手専任のヘッドコーチ(昨年12月選任済)とコーチ(4月)の招聘、各種トレーナーの強化

③学生支援の強化

有力選手確保のため一定の経済支援等を行い、神大への志向環境を整える(4月以降)

◆ 等を重点的に進めてまいります。なお、硬式野球部、吹奏楽部(第1種指定強化部)をはじめ、最近とみに力をつけてきている活動団体などにも、選手の私費負担の軽減も含めた強化支援策を講ずることとしております。こうしたバックアップを行いながら、指導実績や結果に基づいた成果評価も定時に行われるよう期待しております。お見守りください。

◆ 次に、創立百周年に向けた「将来構想」関連の取り組みであります。

◆ まず、昨年4月に創設した「米田吉

盛教育奨学金基金」と、この4月から実施する「米田吉盛教育奨学金」制度につきましても、現在、多様な広報媒体を活用し周知に努めております。時々経営環境にとらわれず、安定的な学生支援を保障するものとして、かつ大学の姿勢を示すものとして、着実な実行を期してまいります。その為には、学内外関係各位のご支援、ご協力が不可欠であります。これまでに倍のご理解、ご助力を賜りますようお願い申し上げます。

◆ 一定年齢の卒業生には思い出深い、横浜キャンパス3号館、4号館でありますが、寄る年波(3号館55年・4号館47年)もあり、昨年の評議員会で、建替えのご理解をいただきました。現在、この秋ごろを目途に横浜キャンパス全体の再整備計画を策定中でありますが、ここ数年来講義室不足が深刻な状況や計画を推進する上でも代替できる施設の早期確保がぞまれることから、計画を前倒しし、3、4号館の約3倍の面積規模をもつ「新A棟」(仮称)を、平成25年春に竣工させることといたしました。昨年本学の大先輩から、これからは教育内容の充実と併せて、大学施設の「見映え」や施設の充実度も大学選択の要素になる、との指摘もいただきました。法人としても、環境配慮型でありつつ、一定のグレー

ドを保った、品位のある、かつ、先々の計画に連動性を持たせた「新棟」としてまいりたいと考えております。

◆ 校友の皆様から、卒業生や卒業生団体などとの連携や卒業生の基本情報の整備、管理と提供等を担う学内窓口を設けてほしい、との要望がかねてから寄せられておりました。そこで、今年度から事務局を再編し、総務部内に「校友課」を新設いたしました。今後、大学と宮陵会、後援会などの双方向で一層の連携強化を目指してまいります。また、地方の組織の動向や行事などを紹介し、ときには現役学生の参加も呼びかけられる、「ふるさと通信」的な専用掲示板を設置いたします。ご活用ください。

◆ さて、先の大学評議員会、理事会において、平成22年度予算が承認、決定されました。これまでに申し上げた取り組みも含め、将来構想の中で実現化の目処のついた事業等につきまして鋭意実行してまいります。

◆ 狩野会長はじめ役員の皆様、全国各支部の皆様には、大学を取り巻く諸環境の慌しい中、引き続き、厳しいご指導と温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学長あいさつ

神奈川大学 学長 中島三千男



皆さん今日は。学長の中島でございます。日頃から宮陵会の皆様には大変お世話になっております。心より御礼申し上げます。昨年度は5月の平成21年度第1回代議員会・通常総会、10月の全国支部長会議で親しくご挨拶させていただきました。また昨年度開催されました後援会主催の地方父母懇談会には、金沢、大阪、新潟、浜松、静岡、仙台、盛岡、青森に出席いたしました。その折には支部長様にご挨拶、また支部の関係者の皆さんには、在校生・父母を対象に、学生生活の送り方や就職活動などについて、貴重なお話をいただきました。また、静岡では宮陵会静岡中部支部の支部総会、また盛岡では校友会岩手支部創立60周年記念祝賀会、広島では広島支部総会にも出席させていただきました。親しく懇談させていただきました。関係の支部長様はじめ皆様方に、心より御礼申し上げます。

志願者減をくい止める!! 会員の皆様の引き続きの御支援を

志願者減を食い止める

さて、まず最初に最新の嬉しいニュースをお届けします。2010年度入学試験において、3年連続の志願者減の流れを食い止め、僅か(150名)ではございますが、志願者の増加を勝ち取ることができました(29,448名)。ご承知のように、18歳人口の減少に伴い、かつて5万人台いた志願者(1991年度が最高数値58,176名)も減少を続け、2005年度においてはついに3万人台(近年の最低数値29,075人)を割り込みました。2006年度の新学部・新学科の開設などにより、一時、3万3千人台を回復しましたが、翌年2007年度には約1,500人、そして2008年度、2009年度には、約1,000人づつと、連続して3年間にわたって減少し、2009年度には再び3万人台を割ってしまいました(29,302人)。このままでは、2005年度の最低数値をも割り込み、2万9千人台も割り込む恐れがあるとして、他大学も取り入れている検定料・受験料の減額・割引制度や米田吉盛教育奨学金の創設、広報戦略の拡大など法人・教学・事務局が一丸となって、対策に取り組んだ結果の成果です。ご協力いただきました会員の皆様にも厚く御礼申し上げます。しかし、私が目標に掲げた、3

万3千人には程遠く、また3万人と云う数にも到達していません。本年度入試に向けて、昨年以上に、力を入れていきたいと思っております。尚、大学院についても、確かに就職難と言う影響はございますが、米田吉盛教育奨学金において、大学院給費生制度や卒業生割引制度など奨学金制度を充実したこともありまして、過去最高の志願者428名(前年比128名の増)を獲得しました。

大学の認証評価で「適合」の評価を得る

昨年度、教学面で大きく前進したことは、大学基準協会に依頼した外部評価(認証評価)において「適合」の評価をいただいたことです。一昨年度、法務研究科の認証評価において不適合の判定を受けたことは記憶に新しいところですが、今回は、大学、大学院、研究所等を含めた大学全体に及ぶ、大掛かりなもので、2年間に及ぶ全学の総力をあげての取り組みでした。2004年に学校教育法の改正に伴い、大学は7年以内一度の外部評価を受けることが義務付けられました。本学は昨年度2009年度に大学基準協会に外部評価を申請していただくものです。この、外部評価は「外部機関」(大学基準協会)から適合の評価を受けること自身、大事なことです。それと共に

この外部評価を受けるに際して「点検・評価報告書」(2008年度、本文編758頁、基礎データ1279頁)を取りまとめなければなりませんでしたが、この報告書を取りまとめるために、教学の全ての組織において、現状と問題点、今後の課題等を明らかにしました。いわば、総点検をやった訳です。その結果、今後の教学改革において貴重な資料を得ることができました。この報告書と、同じく昨年度の下で取りまとめられました、「将来構想推進プラン」の大学部門における中間報告(全10項目、64課題の確定)と併せて、今後の教学改革の課題が明らかに。今後はこの二つの文書をもとに、スピード感をもった改革が行われていきます。

最後に、私事になりますが、昨年末に行われた学長選挙において、再選され、2月5日の理事会で、もう1期、本年の4月から3年間学長職を務めることになりました。法科大学院の強化、箱根駅伝の復活等、大学の運営は、今、どの課題をとっても生易しいものではないと思いますが、微力ながら、この3年間の経験を生かして、新しい任期をこれまで以上に力を注いで勤める所存です。会員の皆様の一層のご指導ご鞭撻を願ひ申し上げます。

全国支部長からの提言・要望 大学側前向きな検討を約束

平成21年10月17日に開催されました「全国支部長会議」の内容につきましては「宮陵第89号」で一部を紹介しました。今号では、その時の意見・要望を宮陵会本部で取りまとめ、12月7日に宮陵会狩野七郎会長と三役が、大学の伊藤文保理事長、中島三千男学長に面談・協議する場を持つことができました。主な要望事項は次のようなものですが、いずれも前向きに検討することを約束されました。

〔6項目の要望事項〕

- ◆ 駅伝への早急な支援強化策の実施
 - ◆ 卒業生に関する情報を担当する部署を大学に設置
 - ◆ 支部からの推薦など、地方の優秀な人材を受け入れる入試制度の新設
 - ◆ 課外活動団体の活動情報等を地方支部へ広報及び情報受入部署の確定
 - ◆ 課外活動団体を支部総会等へ派遣する等の対応部署の確立
 - ◆ 卒業生に関する情報を広報する専用掲示板の大学内新設
- 以上が協議の骨子です。
- ここからは、6項目の要望に起因した各支部代表者（分科会）の意見・要望を紹介します。

北海道・海外地区

- 定期的に支部等へ情報提供する。具体的には、ファックスを毎月初めに定期的に発信できないか。

- 地方支部からの推薦入学が可能な制度の導入

- 道内の校長・教頭等と大学が連携して受験生の確保を図るためのネットワークを構築する。

- 支部組織の情報を大学が有効活用すべきである。そのための部署を設置する。

- 就職して地方に戻った卒業生の情報提

供は支部活性化につながる（他地区からも提言あり）。

- グローバル化している現在、海外で活躍しているOBの姿を学生にもっとPRすべきだ。

- 中国から神大へ入学させるための協力は惜しまない。もっと大学と連携できるような方策を検討してほしい。

東北・信越地区

- 準会員（学生）の部活動等で地方で活動するような部は、本部から情報提供があれば、応援し、結び付きを強めた

い。

●全国の支部で行っている行事を準会員にお知らせする掲示板を大学内に設置してほしい。

●ふるさと懇談会に地方(地元)出身者の教員も参加してほしい。

北陸・関東地区

●宮陵会と大学が連携して情報を共有し、その情報を各支部や学生へ伝える為の大学の対応窓口の設置を要望する。

●各支部から準会員へPRする為のメッセージボードを大学内に作成することを要望する。

●太田市は大学のイベントが多く開催されるので、そのイベントに、大学の学生も参加できれば、支部も含めて盛り上がると思つので検討してほしい。

東海・近畿地区

●大学内に宮陵会の専門部署の設置をお願いする。

●新卒業生を対象に、大学主催の就職懇談会を各都市で開催することができれば、各支部はそれに合わせて支部総会

を開催することで、会員獲得に結び付く。

●準会員が在校時に、各支部との関係が築けるような機会を作してほしい。

●大学は受験生の確保に、もっと支部組織の情報を吸い上げて、活用したらどうか。

中国・四国地区

●かつては入学しやすい私立大学が都市部にしかなかったが、今では地方も増えている。神奈川大学も特徴のある魅力的な大学となるための具体的な方策を講じてほしい。

●宮陵会の役員・代議員は、大学に近い都市部(神奈川・東京)に集中して選考されている。もっと地方の役員を増やし、地方の発言を受け止める機会を増やしてほしい。

(宮陵会本部から……現役員1名は地方からの選出。代議員は地方支部長が選出されているが、今後も地方役員の選出に向け努力していきたい)

●大学の知名度向上のためには、箱根駅伝の出場は欠かせない。そのためには支部活動も重要な位置づけになっている。OBの推薦枠をつくることや外国人留学生の登用等も本気で検討してほしい。



●大学が目指している具体的な偏差値等の方針が卒業生に伝わってこないために、情報提供や援助をするにも的確に行えない。支部の活用を積極的に検討してほしい。

●スポーツで知名度を上げることが一つの方策だが、本来の大学としての魅力を高めるためには、文武ともに力をつける対策を進め、他大学との差別化を図ることが重要である。

●マスメディアを有効に活用する努力が不足している。

九州・沖縄地区

●大学は同窓会組織についての存在や情報を進会員に提供してほしい。

●学生の課外活動団体、例えば有名な吹奏楽部等を地方支部での総会に派遣してほしい。

●課外活動団体（スポーツ等）の有力な受験生情報を提供していきたいので、情報窓口の設置をお願いしたい。

●課外活動団体が全国大会等主要大会に出場があれば、大学からの情報提供によって、進会員への支援ができるので、情報提供してほしい。

●就職して地域に戻った卒業生の情報と連絡先の提供をお願いしたい。

●大学の経営は、健全財政と言われるが、

気を緩めることなく、受験生減少には危機意識をもって、大学経営に当たってほしい。

京浜地区

●支部の助成金や通信費の増額をお願いしたい。また、大学教授の講師としての講演会や課外活動団体を呼ぶ費用について、資金補助や援助をお願いする。また、出演要請の手配も本部で手続願いたい。

（宮陵会本部から……本部で検討する）
前記のような講演や団体の出演依頼の



窓口を設置してほしい。

●会員数を増やすために会員の出身高校を教えてもらいたい。

（宮陵会本部から……個人情報の開示は不可能だが、提供できる可能な範囲で協力する）

職域

●職域支部（企業や役所で作っている支部）があることを進会員にPRしてほしい。

●大学の目指している方針が卒業生に伝わってこない。広報活動を積極的に行ってほしい。

●就職して地域に戻った卒業生の情報と連絡先の提供をお願いしたい。

●OBが情報提供する窓口の設置を。

●OBが現役に対して、就職情報を紹介することにより現役と支部のつながりが出来るので、この様な情報窓口の設置を。

同期

●箱根駅伝予選会敗退は極めて残念である。大学の最高のPRの場だった。OBをもっと活用した全国区の勧誘体制

をつくることをお願いしたい。

●ホームカミングデー等に卒業生した1〜3年の若い会員の参加促進を行い、各支部との交流の場をつくり、支部活動の足場を築きたいのでぜひ企画してほしい。また、教授にも積極的に参加いただき、大学との連携を密にしたい。

同好

（運動部・文化部・ゼミの支部）

●大学への志願者増加へ向けての宣伝効果を重視する方策の検討をお願いする。

●支部活性化は住所の把握が重要である。情報提供に努めてほしい。

●運動部等の活躍に向けて、その支援はOBだけでは難しい。大学側で強化することに取り組んでほしい。

●運動部の活動は多額の費用がかかる。もっと大学での費用負担を考えてほしい。

●山岳部としてクライミング・ボードを作ってほしい。無理なら場所の提供ができないか。

●ホームページを充実させ、情報提供や支部への参加促進を訴える内容を要望する。また、地方へ外向き、交流・理解を深める行事を行ってほしい。

（宮陵会本部から……本部で検討する）

Interview

全国の神大OBで湘南信用金庫理事長の石渡卓さん、神大アメリカンフットボール部を関東大学アメリカンフットボール1部リーグに押し上げた清水玄さん、全日本大学女子サッカー選手権で準優勝の快挙に導いたおしどり夫婦の鎌田ご夫妻、厳しい就職戦線をリードする原田浩行部長にインタビューしました。

湘南信用金庫理事長

石渡 卓さん



神奈川大学アメリカンフットボール部アトムズヘッドコーチ

清水 玄さん



神奈川大学女子サッカー一部監督・コーチ

鎌田俊司・路代さん



神奈川大学就職事務部長

原田浩行さん

石渡 卓さんに聞く

湘南信用金庫理事長

Suguru Ishiwata

神奈川県横須賀市に本店を置く（51店舗・1出張所を含む）湘南信用金庫に神大OBである石渡 卓理事長を訪ねました。
2年前湘南信用金庫第2代理事長に就任され多忙のなかインタビューを快諾して頂き近況などお聞きしました。

広報（宇久田） 本日はOBということに

甘えて訪問致しました。全国広しといえ信用金庫の理事長さん就任は初の快挙だと思います。どうかいろいろ後輩のために率直なご意見を頂ければと存じます。

石渡 お会いできることを楽しみにして

いました。私は実はいままで卒業生でお世話になっていながらOB会（宮陵会）に出ていなかったんですよ。しかし宮陵会三浦半島支部の古川さんが支部長就任直後、カメラ持参で来ましてオメデトウこれからは宮陵会の会合に参加してくれないか……と大先輩からの

依頼を受けました。

そんなご縁で支部の会合時 経済講演をさせて頂いたりしました。

広報

どんな学生時代でしたか？

石渡

入学のオリエンテーションの時から学園紛争真っ只中で、正直勉強どころではありませんでした。昭和51年の経済学部貿易学科の卒業です。ゴルフ部で鍛えられ以後商売のうえでもゴルフが役にたちましたよ。当時日大ゴルフ部は絶頂期をむかえようとして あの手木三郎もいまして同じ学生とは思えないほどもうプロという感じでした。私は中学時代バスケット、柔

広報

道そして高校時代はサッカー、スポーツは大好きです。根っからの体育会系といえるんでしょうか。仕事についてから……仕事観というかどうでしょうか。

石渡

山あり谷ありですね。しかし一所懸命やりましたね。36歳で支店長にして頂き横浜市内の金融機関支店長会でも最も若い支店長でした。回りの先輩がいろいろ教えてくれ、ほんとうに皆に支えられました。

理事長就任時は当金庫も大変な時期で、役員職員一丸となってリストラに取り組みどうにか先が見えるところまで来ました。

あの「Yes We Can!」

オバマ大統領ではありませんが変革、変わる、ことでしか生き残れない、そうダーウィンの進化論を

広報

実践しています。地域になくならない信用金庫になろうと支店を回っています。私は現場主義を徹底しています。

石渡

もう少し元気が欲しいかな、ちょっとぐらい失敗してもいいんじゃないでしょうか。時には失敗が人間を成長させます。面接して最近の女子学生のプレゼンテーション能力は素晴らしいですね。主張が伝わります。男子学生にもっと頑張つて欲しいですね。どんな仕事でもいいですから、仕事を通して人間形成して欲しいですね。そう、要はそれぞれが仕事にむかう姿勢が大切ですよ。仕事の中に興味を見つけた人はどんどん成長していきます。



広報 少し私生活の面をお聞きしてもよろしいですか。家族とか、趣味とか…。

石渡 家族は娘が2人いまして、それぞれ家庭をもっており3人の孫にも恵まれました。現在はわたしの両親と妻の4人となりました。父は88歳となりましたが、お陰様で元

気にしています。

ちよつとうちあけてしまいますが、妻とのなれそめは同僚が休んだため急遽私がピンチヒッターで八百屋さんに集金に行つたんです。実はその娘さんなんです。同居して親の面倒をみてくれるか？快くOKしてくれましてねえ

広報

。実は姉さん女房でしてほんとうに家内あつてのわが家族ですよ。感謝です。ああそれから今日2月4日が私の56回目の誕生日なんです。両親に感謝の日でもあります。

おめでとうございます。記念すべき日にお邪魔いたしました。

それでは最後になりますが石渡理事長の人生上のモットーなどお聞かせ頂きますか。

石渡

モットーですか・・・ひとつは、〈泰然自若〉もうひとつは〈揺れても沈まず〉いずれも何がおきても逃げずによけないで堂々と歩む…人生やわらかくして凜として生きるということでしょうか。

私はほんとうに皆様に支えられて生きている、そんなことをつくづく思います。

◆ ◆ ◆
広報の感想 理事長の終始エネルギーで前向きなリーダーの姿勢に感動しました。そして理事長然としないお人柄に好感をおぼえ理事長のご健闘を祈りつつ湘南信用金庫本店をあとにしました。

(宇久田)

課外活動を語る会が開催されました

2009年度にさまざまな分野において活躍した「課外活動団体を語る会」が、横浜・湘南ひらつか両キャンパス合同で2月2日に横浜キャンパス2号館において開催されました。

会場には、チョモランマ、ビンソン・マシフと続けて登頂に成功し単独大学の山岳部では世界初となる7大陸最高峰を制覇した山岳部、全日本大学女子サッカー選手権大会で準優勝をおさめた女子サッカー部、秋季リーグ戦を制し関東地区大学野球選手権大会への出場を果たした硬式野球部、第57回全日本吹奏楽コンクールで通算22回目となる金賞受賞を果たした吹奏楽部など、大きな舞台で活躍した体育会団体や文化系クラブ41団体の学生・指導者など約450名が集い、互いに今年の健闘を語り合うとともに、来年の更なる飛躍を誓いました。



4年ぶり関東リーグ一部昇格

清水 玄さんに聞く

神奈川大学アメリカンフットボール部アトムズヘッドコーチ

Gen Shimizu

神大アメリカンフットボール部アトムズは、2009年12月20日に行われた、帝京大学との入れ替え戦に勝利し、4年ぶりの関東リーグ一部昇格が決定しました。今回は、神大OBの清水ヘッドコーチへのインタビューを、お願いし、勝因と、指導者、チームの魅力を探ってみました。

Q アトムズのチームカラーはなんでしようか？

チームが目指すものは、「可能性の追求」と「称賛されるチーム」です。アメリカンフットボールにおいて、何かを成し得る可能性を信じ、その可能性を信じ、その可能性を最大限に伸ばすことをチーム理念にしています。

チームカラーは、アメリカンフットボールに対する「想い」を大切にしているチームです。

「想い」を大切に、一人ひとりが、全員が頑張るチームです。

Q 入れ替え戦の直前に、選手に言った事。そして清水ヘッドコーチの戦う前の決意をお聞かせください。

4年生には、勝ち負けも大切だが、それ以上に後輩達にフットボールへの「想い」を伝えるようにと、言いました。

アトムズの4年生として、努力する姿、最後までやりきること、決して諦めない心を伝えて欲しいと。

今回の入れ替え戦の戦略は、「dead or alive」でした。細かい戦術や作戦ではなく、「生きるか死ぬか」の気持で戦おうと話しました。

同時に、学生と同じように、自分自身も進退を賭け、1部リーグ昇格を果たせなかった場合、辞める覚悟で試合に臨みました。

Q 勝つ為に必要な事はどのようなものがありますか？

「運」が、必要だと思います。

良い学生、良いコーチに出会う事はもちろんのこと、良い対戦相手等、あらゆる面で、「運」めぐり合わせが重要だと思います。

Q 大学時代体育会に所属する意義はなんでしようか？

社会へ出たら、自分の努力だけでは、結果が出ない事に多く直面します。大学時代とは、自分達だけの努力で、「夢」を自己実現できる、最後のチャンスだと思います。

学生達には、フットボール自体は、社会へ出て役立たないものだと行ってあります。その何の為にも成らない事に、夢中になり、ひたむきに努力することが大切で、社会へ出て、ひとたび価値を見出せるものに出会った時、信じられないほど、真剣になれると思います。そして、大学時代に無駄なことに努力した事が良かったと後から思うと思います。

ですから、アトムズの運営になるべく学生達がかかわれるようにしています。

主将や主務、レギュラーも4年生全員が話し合っで決めていきます。

フットボールのうまい下手ではなく、日頃頑張っで、努力している者を選ぶように話しています。

Q ずばり、アメフトの魅力とはなんでしよう？

自分達でイメージし、計画し、立てた作戦を、プレー毎に、表現できる素晴らしいさだだと思います。

Q アトムズに賭ける夢をお聞かせください。

学生日本一を決める、甲子園ボウルに出場し、勝利したいと思っています。

Atoms
KU AMERICAN FOOTBALL



Q 入れ替え戦勝利後に、選手に言った事は？

4年生には、感謝を、3年生以下には、一部リーグで戦える喜びと、4年生から伝えられた「想い」を、大切にしたいと言いました。

Q 延長戦で試合を決めた、最後のプレーの作戦は？

「お前たちの好きなプレー、得意な攻撃をしろ」と、指示しました。

学生が作戦を決め、忠実にプレーして逆転タッチダウンを決めてくれました。

Q アトムズを支えてくれるOBが、多いのは何故ですか？

OBの約2/3が、OB会費を払い、全面的に支援を頂いているので、感謝しています。

自分達が果たせなかった夢を、後輩に託すために支援してくれているのとは少し違うような気がします。

自分達が大学時代にアメリカンフットボールにかけた「想い」が正しかった、素晴らしい学生時代を過ごせたことを認める為に、毎年、OB会費を支払い支援してくれているのだと思います。

Q 今季関東一部リーグ戦への、戦う意気込みをお願いします。

私達アトムズは、「銀」です。「金」は何もしなくても輝き続けます。

「銀」は磨き続けないと、輝きません。磨き抜かれた「銀」が、強豪校の「金」より輝く事を証明したいと思っています。



インタビューを終え、本当に自慢できる素晴らしいコーチ、後輩達だと思った。入れ替え戦の現場にいた私には、今でも勝利の瞬間が、眼に焼きついている。

最後の攻撃の時は、神大OBが、総立ちになり、後輩を応援した。試合後、抱き合い、喜び涙した。OBと、選手が一体になった瞬間を味わう事ができた。勇敢に攻めのサインを出したのは、学生だったと後で知り、より感動が深まった。

応援するOBにとっては、後輩たちの活躍は、夢を見れる楽しいもの。応援しながら、自分の青春時代も楽しかったなと懐かしむ。神大で学生時代を過ごせて良かったとも、確認する。アトムズのOBが、何故後輩達を支援するのも、わかった。これだから、応援は熱くなり、やめられない。改めて愛校心をくすぐる試合と、インタビューであった。

◆ ◆ ◆
■ 神大アトムズ清水ヘッドコーチプロフィール

S 59年法学部法律学科卒、学生時代は、体育会アメリカンフットボール部に所属。卒業後、強豪実業団チーム、日産パルサーズで、11年間活躍、日本リーグの実績は、2位。ポジションはセンター。現役引退後、筑波大学大学院で、コーチ学を学び、ヘッドコーチに就任。現在千葉で、中学受験から大学受験の、有数の塾、予備校グループの経営に携わり、多忙な日々を送っている。
 (永田)

みなさまの情報をお寄せください！

神大卒業生、今学んでいる神大生、教職員のみなさま、日頃お世話になっている神大関係者のみなさま!!「会誌」などお届けし広報活動している広報委員会です。広報委員会ではなるべく多くの情報をみなさまにお届けできるよう努力していますが、「会誌」の紙面をもっと充実させるために、みなさまからの情報を募集しております。「当時の思い出」「あのころの六角橋」「今、こんな生き方をしています」「ふるさと自慢」「あの一と今どうしています?」「学生諸君へ!」などなど、紙面いっぱいみなさまの交流の場にしてください。

先輩が元気のいい学校はこれから将来が楽しみと言われる。ささいなことでも結構です。お互い明日へのエネルギーをもらい

ましょう。とくに期限をもうけませんし、原稿の決めごともありません。メロ程度のもでももちろんOKです。どしどしお寄せください。(会誌「宮陵」年1回4月発行／「宮陵会報」年2回7月・12月)の発行となっております。掲載時期は若干ずれる場合がありますのでご了承ください。

■問い合わせ・送付先は下記へ

(可能ならば写真1枚添付願います・スナップ可)
 〒221-0802 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 神奈川大学内
 社団法人宮陵会広報委員会
 TEL.045-481-5661(内線2451~3) FAX045-413-0791

第18回全日本大学女子サッカー選手権大会準優勝

鎌田俊司・路代さんに聞く

神奈川大学女子サッカー部監督・コーチ

Shunji Kamata & Michiyo Kamata

Q 第18回全日本大学女子サッカー選手権大会準優勝をどう思いますか？

神奈川大学女子サッカー部創部時から、手探りな状態で今日まで指導を行ってきました。今回準優勝したのは、今までの積み重ねの結果としてついてきたものです。準優勝はむしろん喜ばしく、学生達も大会まで大変良くやってきたと感じますが、この結果はまだまだ納得のいくものではありません。現在は、既に過去のことと一区切りつけ、チーム全体で気持ち新たに、次の目標に向かおうとしている状況です。

Q 学生には普段からどのような声かけ・指導を行っていますか？

基本的に自ら声かけは行わず、学生を褒めることもあまり多くありません。そもそも部員は指導者によるスカウトによる入部ではなく、あくまでも「神奈川大学でサッカーをしたい」と感じる学生によって成り立っています。そのため、時

に学生は厳しいと感じられる指導も多いかもれません。しかし、学生に「当たり前のことを当たり前やらせる」このスタイルは今後も変えないつもりです。また、学生にはその場の状況にあった指導をその都度行っていますが、共通して行っていることは「常に周りの状況を見て判断し、自ら考えて行動する」ように促していることです。学生の個性は

もちろん大事で、良いところは個々に伸ばしていきますが、チームとして戦う中で、いかに学生一人ひとりが周りの状況を判断し、足並みを揃えられるかが大事になってくると感じています。そして自ら行動出来る力が備わった状態で社会に出た際に、それがきつと自立に繋がると信じています。

Q 指導するなかでのこだわりは何かありますか？

他のチームと違うこだわりは、「当たり前のことを当たり前やらせることを

絶対に譲らない」ことです。例えば、挨拶、目上の人への態度や周りの人への気配り、周りの空気を読む、周りの状況判断等、こういったものが出来なければよい良い人間性を形成出来ないと思います。またそういった人間性はプレーにも響いてくるため、これだけは絶対に譲れません。また、サッカーをやるのは大学時代の思い出作りではありませんから、仲間同士仲良くなるよりもサッカーを上手くなるように常々学生に伝えていきます。

Q 指導するなかで、どのような喜びを感じますか？

昔から大好きなサッカーを通じて、学生を始め、普段は見えない多くの方々と関わること喜びを感じています。また、学生達と共に1つの目標に向かって時間を共に過ごせることも喜びを感じる要因の1つとなっています。この他に、試合ともなればチーム全体が真剣になるため、その時の緊張感も好きであり、こ

れもまた喜びを感じる瞬間です。そして、特に大きな喜びを感じるのは、学生達と同じ4年間を過ごす中で、入学前から卒業時までの間で人間としての大きな成長を見ることが出来ることです。この喜びはまるで我が子を育てるような感覚に似ています。

Q 指導するなかで、どのような難しさを感じますか？

指導するなかで、同じ人間なのだから男女という性別に難しさはありません。そのため、時には厳しい指導を行うこともあると思います。しかし、最も難しいと感じるのは、「学生全体の意識を統一させること」です。1つのことを言ったら1のみを理解するのではなく、そこから学生自らが気付き、自ら行動出来るようになってもらうのが理想です。現段階ではまず、0と100の平均50よりも、49と51の平均50へといかに近づけるかが難しいところだと思います。そして、最終的にはその

平均自体を上げられればいいと思っ
ます。

Q 学生とのコミュニケーションはど
のように行っていますか？

学生とは、日頃の練習内や全体練習後
に行われる個人練習時にサッカーを通じ
てコミュニケーションをとっています
が、合宿時は家族を合宿所まで連れてい
くこともあるため、家族ぐるみで学生と
コミュニケーションをとっています。

※鎌田監督・コーチは指導者の顔の他
に、3人のお子さんをもつ親の顔もも
っています。そのため、合宿時には学
生がお子さんにサッカーを教える一面
が見られたり、自ら子供の世話をする
一面が見られたりします。学生にとつ
ては、サッカー以外にも楽しい時間を
過ごしている様子です。サッカーを通
じて監督・コーチ家族と学生がコミュ
ニケーションをとることは夫婦だから



こそ出来るコミュニケーションのとり
方だと思えます。

Q 卒業後の学生との
繋がりは？

卒業後との、学生の集まりは特にあり
ませんが、卒業生から手紙がくることも
あります。卒業後の学生は、指導者や選
手になるケースがあるため、時に敵方と
して試合場で再会するケースもありま
す。また、地方で試合のあった際には地
元に戻った卒業生が観戦に来ることもあ
るため、ここでもサッカーを通じて卒業
生との関係は長く続いています。

Q 今後どういうチームにしていきた
いですか？

今回、全日本大学女子サッカー選手権
大会では1位になるつもりで、めいっば
いやってきた結果としての準優勝でし
た。次回は単に優勝を目指すというもの
ではなく、優勝のためには、気持ちも新

たにゼロの状態から1つ1つ積み上げて
いく必要があります。そしてその結果と
して、全国の大学で常に頂点に立てるチ
ームになればいいと思うし、またそれ
が出来ると信じています。そのためには、
今までは無かった練習内容を組み入れた
り、学生達の意識向上に力をいれたり
と今までの指導が必要になってくると思
います。そして、学生1人1人の意識
を指導者に向けることで、更にチーム一
丸となっていきたいと思っています。

神奈川大学体育会女子サッカー部 沿革

- 2001年4月 創部。
- 部員数名でスタート
- 2002年4月 関東大学女子サッカー
リーグ2部優勝
入れ替え戦で東京学芸大学
に勝って1部昇格
- 2005年 部長が鎌田章名誉教授よ
り石積勝教授へ交代
- 第14回全日本大学女子サッ
カー選手権大会3位
- 2006年 湘南ひらつかキャンパス
人工芝サッカー場完成(11
月)
- 第15回全日本大学女子サッ
カー選手権大会3位
- 2009年 第23回関東大学女子サッ
カーリーグ戦優勝
- 2010年 第18回全日本大学女子サ
ッカー選手権大会準優勝

■鎌田 俊司 監督のプロフィール

1964年6月8日生まれ。日本体育
大学卒業後、横浜国立大学院に進学。大
学院卒業後は東京水産大学、神奈川大学
他3大学で非常勤講師を2年程着任後、
関西のL・リーグ(旧なでしこリーグ)
の宝塚バニーズレディースサッカークラ
ブにて3年程指導。その後、神奈川大学
男子サッカー部を5年指導し、同女子
サッカー部の設立と共に指導をしてきた
鎌田章名誉教授(現監督の父)から引き
継ぐ形で監督としての指導が始まった。
学生時代から現在に至るまでにママさん
サッカーや日本体育大学、横浜国立大学
等で指導をしてきたことから、それらの
経験を活かし、同部の指導を週2日夜遅
くまでみっちり行っている。

■鎌田 路代 コーチのプロフィール

1969年7月23日生まれ。日本体育
大学卒業後、L・リーグのフジタ天台S
Cマキユリー(後にフジタサッカーク
ラブ・マキユリーフジタサッカークラ
ブ・マキユリーに改名。J1・リーグ
に昇格したベルマーレ平塚と兄妹チー
ム)で5年プレーをして引退。その後、
大学時代からのサッカー経験を活かし、
日本体育大学の女子サッカー部のコーチ
を3年程経験。現在は、神奈川大学女子
サッカー部のコーチとして、夫である鎌
田監督と共に週3日は指導を行い、1日
はフィジカルトレーナーとして指導を行
っている。(時田)

就職氷河期にどう対応

原田浩行さんに聞く

神奈川大学就職事務部長

Hiroyuki Harada

就職事務部長の原田浩行さんに神奈川大学学生の就職に関する状況についてお話をききました。

Q まずは、学生の就職の現状はいかがですか。就職氷河期の再来とも言われていますが。

はつきり言って厳しい状況です。就職氷河期といわれた2000年前後は、有効求人倍率が1倍を割ることもあり採用を中止する企業がかなりありました。現在は採用を中止する企業は減りましたが、採用者数をかなり絞っています。そのため企業は、「将来を担える優秀な人材だけを採用する」傾向が強まっています。量より質の「厳選採用」がかなり顕著になっており、例年より面接回数を増やしたりして、厳しく選考をしています。その結果以前なら内定を取れていたような学生でもなかなか内定が取れないといった状況です。最終面接で落とされるケースもかなり増えました。

Q 各社とも狭き門となっているので、そうですね。

そうですね、今は「どの大学を出たか？」よりも「大学に入学してからの3年間どんな目標を持ち、どのような力を育んできたか？」が問われます。まさに個々の学生の持っている人間力というものを非常に重視しているといえます。また、就職が厳しい一方でミスマッチも多いのが現状です。せっかく就職したのに3年程度でやめてしまう。

Q どうしてそういうことになるのでしょうか。

一番の原因は、自分が何をしたいのか、何に向いているのかといったところが希薄で、企業研究も余りせず就職を決めてしまうことにあると思います。現在企業情報などはインターネットで

すぐに調べることができますし、就職課でも、より詳細に企業研究ができるデータベースも導入しています。しかし、そういう情報だけでは、残念ながら各企業の本質的なところ、体質や風土・具体的な仕事の内容、やりがいや厳しさなどは、なかなかわかりません。やはり生の情報を得ることが大変重要だと思っています。そこがわかっているとミスマッチはかなり防げると思います。

Q では、具体的にはどうしたらいいのでしょうか。

やはり、実際に働いている人に話を聞くといったことが大切だと思います。かつては各企業の先輩を訪ねていくO・B・OG訪問が盛んで、現場で働く先輩から直接話を聞くことで、人事担当者が話すことは違った側面を知ることができました。同じ神奈川大学出身ということで、説明してくださる卒業生側も学生の方も、気持ちの入り方も違ってきます

し。ところが、個人情報保護法の施行以来、企業側が社員の情報は出さないという姿勢に転換したところも多く、卒業生の在籍情報が収集しづらくなってきました。

でも、実際にO・B・OG訪問をし、先輩からしっかり話を聞いてきた学生というのは、訪問した企業を選ばない場合でも比較的自分に近い年齢の先輩の実体験、現場の話を聞けたということで、企業への選択も明確になり、就職に対する心構えそのものにも変化が現れ、取り組み方が違ってくるというケースが多々見られます。次に就職課の窓口に来たときに明らかに変化が見て取れますね。また、訪問した先輩からまた別の卒業生を紹介していただけたというような話も聞きます。学生にとって、そのように訪問を受け入れてくれる卒業生の存在は本当にありがたいものです。



就職事務部長 原田浩行さん

Q でも、個人情報の問題もあり、学生にとっては卒業生の情報を得るのが難しそうですね。

そうですね。情報量そのものが減っていますからね。そこで、就職課ではより多くの学生にそのような機会を与えたいということ、2つのことを行っています。1つ目は合同企業説明会等企業の採用側による説明会に加え「実践！OB・OG訪問〜就職した先輩と直接話そう〜」と題して、就職後10年以内の卒業生を中心に約40人程大学に来ていただき、OB・OG訪問のいわば出版版というような企画を行っています。参加した学生には大変好評ですね。やはり、「企業説明会ではわからなかった実態を聞くことができた」「不安で一杯だった

が、先輩の話聞いて就職に対して前向きに考えられるようになった」というように就職活動に対する取り組み方にも変化が現れる学生も多くなります。参加していただいた卒業生の皆さんは、本当に熱心に話をしてくれて、後輩のために何か協力したいという気持ちで学生に接していただいているので、本当に感謝しています。

2つ目は、卒業生に、実際に働いている感想や内側から見た企業内容などの報告として「就業状況報告書」の提出のご協力をお願いしています。その際、学生に情報を提供してよいかの可否を確認し、提供してよいという卒業生の情報は、学生に提供しています（神奈川大学ホームページ キャリア・就職支援のページで

「OB・OGの方へ」のところで報告書の提出についてご案内及びお願いをしています）。

Q 就職が厳しいなか、卒業生の協力も得ながら色々な就職支援を大学でもしているようですが、他にはどのような対応をしているのですか。

既にご存知のとおり、大学進学率が5割以上になり進学の目的が希薄な学生が増えているといわれておりますが、本学でもそうした傾向は残念ながらあります。そういった学生は目的がないまま2年間を過ごし、3年生になって急に就職活動に入り、自己分析や将来展望を問われても、回答出来る学生が少ないのが現実です。

そこで、大学では2006年度から初年次及び低学年次を中心とした教育プログラムとして「ファースト・イヤー・セミナー（FYS）」と「キャリア形成科目」を正課として行っています。これは、充実した学生生活を送る上で、大学生としての資質を身につけることを目的としています。「読み、書き、調べ、問題を発見し、自分の考えを発表し討論でき、自分の責任のもとで行動できる」力を育み、「対人関係力」や「自己表現力」をつけるとともに、安易な職業選択に走らせるのではなく、自分の将来像を段階的にじっくり考えて選択させる「職業観の育成」を醸成させ、入り口（入学）から出口（就職）まで、トータルに人間形成、

人間力の向上を行うことを目的に取り組んでいます。

Q そうですが、大学としても色々な取り組んでいるのがよくわかりました。

ところで、卒業生への期待というのは、今までのお話を聞くと単に就職のお世話をして欲しいというよりも、就職のときの体験や今の仕事での体験を話してあげることが学生にとっては非常に有意義で役に立つということなのですね。

そうですね。就職課からお願いというと、とかく就職のお願いと受け取られがちかと思うのですが、我々就職課の職員は、学生が仕事を通じ「自己実現」できる企業を探し、ミスマッチにならないような就職ができることが大事だと思っています。そのためには、実際経験していない我々が各業界や各企業の仕事のことについて窓口で10回言っただけより、実際に働いている卒業生から1回聞く方が仕事のイメージもつかめ、効果があると思っています。もちろん、求人情報は最もありがたい情報です。卒業生で人事の責任者や役員の方からぜひ神大生を採用したいなどとお話をいただくこともあります。本当にうれしいことです。厳しい就職環境の中、ぜひ卒業生の皆様にご点でご支援をいただければと思っています。

（堀江）

最終講義 「犯罪と刑罰を考える」

法学部教授 山火 正則



昨年の秋、ゼミ卒業生の有志から、最終講義の実施方について打診がありました。本学に赴任してから、学生・卒業生・教職員の皆さんに恵まれ、大過なく教育・研究を続けることができましたので、これらすべての皆さんに対して感謝の意を表するものとして、これをお引き受けすることにしました。その後、主催は、法学部ということになりましたが、用意周到な卒業生の皆さんのご協力によって、去る1月23日、10—41講堂が一杯になるほどの盛況のうちに最終講義を終えることができました。会場には、宮陵会関係の方もお見えになっておられました。大変ありがたく思っています。

テーマは、「犯罪と刑罰を考える」としました。研究のときも授業のときも、常に念頭におかなければならない刑法学上の根本問題です。これまでの

教育・研究の総括という意味もあり、これをテーマとした次第です。刑罰を科すことの正当化根拠から犯罪の意義という順序でお話しを進めました。以下、その概要です。

◆ ◆ ◆

一 刑罰は、犯罪者に対するものであるにせよ、国家がその生命、自由又は財産を奪うものです。したがって、啓蒙期以降、国家が刑罰を科すことの正当性を人間の理性によって根拠づけようとして、様々な展開がなされてきました。しかし、今なお、ひとつの明確な結論に到達したとはいえない状況にあります。そういうなかであって、その根拠を「犯人が犯罪を行ったこと」に求める応報刑論が正しいと思われています。しかし、カントのように、目的はおよそ考慮すべきでないとは考えていません。

二 そもそも、市民社会における刑罰は、全ての人が生存のために必要な重大な生活利益を侵されることなく、平和な生活を営むことを望んでいることに由来するものです。これは、全ての人が望んでいる以上、全ての人に保障されなければなりません。そのためには、全ての人がお互いに他人の重要な生活利益を侵害・危険化しないことを約束する必要があります。「人は自由だが、他人の重大な生活利益を侵す自由はない」。そしてまた、この約束

の遵守を保証するため、万が一にも自己の意思によって他人の重要な生活利益を侵害・危険化したときには、その責任をとって、これに対する応報としての制裁に甘んじること同意する必要があるとあります。そのため、全ての人の平和な生活を保障する装置として国家を作り、これに制裁権を与え、その総意として、あの約束と同意を犯罪と刑罰を定める刑法に客観化したのです。ここに、重大な生活利益は、法によって保護される「法益」となり、応報としての制裁は、「刑罰」となったのです。

したがって、近代国家における刑罰は、平和な生活を願う市民の要請に基づくものであり、刑罰を科すことの正当性は、「客観化された人々の総意に基づく応報」に求められることとなります。正義からの要請とするカントの応報刑論に対して、市民の要請に基づく応報刑論です。その内容も、カントのような「目には目を歯には歯を」の同害報復ではなく、犯人の責任に応じた応報で十分でしょう。

また、刑罰に犯罪を予防する効果があるのなら、刑罰を法律に規定するときに「一般市民が犯罪に陥ることを予防する目的」「一般予防目的」を考慮することも、刑罰を科すときに「犯人が再び犯罪に陥ることを予防する目的」(特別予防目的)を考慮することも許されるでしょう。それは、全ての人が平和な生活を望んでいることに由来する刑罰と矛盾するものではないからで

す。もちろん、これは、市民の総意に基づく応報の範囲内、犯人の責任に応じた応報の範囲内においてであり、犯罪の予防目的を強調して、その範囲を超え、軽い罪に対して重い刑罰を規定したり、改善が認められるまで長期にわたって犯人を刑務所に拘禁することは許されません。刑罰論のなかには、刑罰がこのような目的をもっているから正当化されるというものもあります。が(一般予防論・特別予防論)、犯罪予防目的の強調による重罰化の可能性のあるところに、疑問があります。市民の要請に基づく応報刑論は、このような重罰化に歯止めをかけ、人権保障機能を果たすものでもあります。

三 このように考えると、刑罰権を行使できる対象としての犯罪は、おのずと、「法益を侵害ないし危険化する行為」ということとなります。そういう実体のない行為は、いかに倫理的に好ましくない行為であっても、犯罪として処罰の対象とすべきではありません。

その意味において、例えば、道交法上の免許証不携帯の罪には、それがいかなる法益を侵害・危険化するとか、立法論上の疑問があります。また、偽証罪は、「法律により宣誓した証人が虚偽の陳述したとき」に成立しますが、判例・通説は、この「虚偽の陳述」を「証人の記憶に反すること」とであると解釈しています。しかし、そうだとすると、証人が記憶に反することを陳述したときは、それが客観的に

真実であったとしても、偽証罪が成立することになります。司法作用に何ら危険を生じさせてないにもかかわらず、犯罪が成立するとすることには、解釈論上の疑問があるといわざるを得ません。

四 市民が国家に与えた範囲内において刑罰権が適正に行使されているか、法益を侵害ないし危険化する行為が犯罪として処罰の対象とされているか、刑法を学ぶ者だけではなく、刑罰権を国家に与えた市民が常に強い関心を向けておかなければならない問題です。

◆ ◆ ◆
この度、最終講義の概要を「宮陵」に掲載する機会を与えられましたことを光栄に、そしてありがたく思っております。宮陵会の皆様には、本学に赴任して以来、本当にいろいろとお世話になりました。心から感謝申し上げます。宮陵会の益々のご発展と皆様のご健勝・ご繁栄を心からお祈り申し上げます。

山火正則先生略歴

1939年12月 北海道小樽市生まれ
 1971年4月 神奈川大学法学部専任講師
 1972年4月 同助教授
 1979年4月 同教授
 1993年4月 法学部長
 (至1997年3月)
 2000年7月 神奈川大学学長
 (至2007年3月)
 法学部長を2期、学長を2期務められた他、教務部長、学長補佐、法学研究科委員長、法人評議員、理事などの要職を歴任されました。

三平和司さん、藤川祐司さん 大学サッカーからプロの世界へ!!

本学体育会サッカー部に所属する三平和司さんがJ1の湘南ベルマーレに、藤川祐司さんがJ2の水戸ホーリーホックに入団することが決定しました。

この2人の選手は、大学入学時からレギュラーとして活躍し、1年次には天皇杯出場、2年次にはサッカー部創部の総理大臣杯出場（関東から5枠出場できる全日本大会）、関東大学サッカーリーグ1部昇格、3年次にも総理大臣杯出場、関東大学サッカー1部リーグ9位、4年次には、関東大学サッカー1部リーグ8位と輝かしい成績を収めました。

また個人では、4年次にユニバーシアード代表として、世界の強豪国と渡り合い銅メダルを獲得する活躍をしました。

そんな2人から、これからの抱負をいただきました。

「大学の4年間で学んだことをプロの世界でもしっかりとやっていきたい。大学ではチームのために働くことが第一だということを学びました。また、きれいなゴールだけでなく泥臭いゴールも1点は1点だという意識に変わり、プロでも泥臭くたくさんのゴールを狙っていききたいと思います。僕自身、一生懸命やるのが大森監督、チームへの恩返しにと思っていきます。そして、何よりも今までお世話になった方への感謝の気持ちを忘れずに、プロサッカー選手としてプレーしていききたいと思いますので、応援よろしくお願ひします。」（三平和司）

「今まで自分を支えてくださった大森監督をはじめ神奈川大学のスタッフ、チームメイト全員に感謝しています。またここまで自分を支えてくれた、

育ててくれた人達にも感謝しています。その期待に応えるためにプロとしての自覚を持ち1日でも早く試合に出て、チームの勝利に貢献し、自分自身もレベルアップしていけるよう一生懸命頑張っていきたいと思いますので、応援よろしくお願ひします。」（藤川祐司）

三平選手は、今日本人に不足している得点能力が高く、どの位置からでもゴールを狙い、試合に出場すれば何かをしてくれると期待される選手です。

また藤川選手は、1対1での守備能力が高く闘志を前面に出し、チームの士気を高める選手です。またボールを持ったら、正確なロングフィード、クロスボールも武器になります。

これからの2人の活躍に期待し、また近くで試合がある時は、会場まで足を運んで応援していただけたらと思います。

今後も、将来が輝かしい2人の応援をよろしくお願ひいたします。



▲三平和司さん



▲藤川祐司さん

横浜市大倉山記念館をたずねて

神大（横浜専門学校）と大倉山記念館の縁は古くまた深い。太平洋戦争も終わり徐々に外地からの復員も始まり学生も帰って来た。戦後の混乱時期であったが学校再開となった。が、学び舎がない。昭和20年10月、集まった学生（50人前後？）の授業が始まった。その場所がこの大倉山記念館である。この建物昭和7年の築と聞かすそのギリシャ風神殿を彷彿させる威風堂々の建物は周囲を圧倒する。よくも無傷でとそのたたずまいに感謝をおぼえる。

その当時この学び舎で実際学んだという岩崎幸雄氏（昭20経卒）に話を聞いた。「私は卒業証書はもらったけど卒業式はやっていない。大倉山に行ったのは3ヶ月位だったか半年あったか、東北帝大を出た長谷川松治教授に教わったよ。先生は後に東北大学の教授となり母校につくしたと聞く。なつかしいなあ大倉山」もう少しこの記念館について説明すると、もともと建築されたのは洋紙業界で活躍した大倉邦彦（おおくらくにひこ）氏で実業家として成功をおさめた氏は社員の教育にも心血をそそいだらしい。それが今でも建物の一角を占める大倉山精神文化研究所である。この辺の事情もこの記念館の館長としてボランティアで携わった松代 肇氏（昭27機卒）に話を聞くことができた。

松代氏は教職の道に進み横浜市立境木中学校長を最後に退任し、後に館長をおおせつかった」とのことである。記念館は現在、市民の各種集会や音楽会に使われ横浜市指定有形文化財になって

いる。

広報が取材で訪れた日は、行事看板に【神奈川大OBルーデンス】とあった。のぞかしてもらい代表の高田英司氏（平元法卒）に話を聞くことが出来た。ルーデンスはオランダ語だそうでボードゲーム、日本流に言えば「すごろく」に似たものらしい。月に1回OBで集まって楽しんでいるという。現在会員は20名程度だそうで「今後宮陵会行事の参加をお願いします」と約束をして記念館を後にした。



大倉山記念館

神奈川大学OBルーデンスクラブの方々



第86回 箱根駅伝 森本卓司選手・染谷和則選手の活躍

2010年1月2日・3日に行われた第86回東京箱根間往復大学駅伝競走に、本学駅伝チームから関東学連選抜チームのメンバーとして森本卓司選手（2010年3月卒業）・染谷和則選手（2010年3月卒業）が出場した。

森本卓司選手は、学連選抜チームのキャプテンとして往路第1区（東京・大手町〜鶴見中継所21・4km）にて、レース序盤から先頭集団を率いて闘志みなぎる力強い走りを披露し、各大学のスピードランナーがひしめくなか、1時間03分00秒で第4位（トップとの差は33秒）の好成績を残して第2区のランナーにたすきをつなげた。

また、染谷和則選手は「花の2区」とともに神大横浜キャンパスの地元区間である復路第9区（戸塚中継所〜鶴見中継所 23・2km）を「ジンダイ・染谷」の大声援を受けながら、陸上競技生活最後の勇姿を見せ、1時間12分10秒で区間第7位の記録で無事ラストランナーに襷をつなげた。

このたび、本誌では、チーム出場を果たせなかった悔しさを胸に抱きつつ、箱根路に挑んだ二人の選手に卒業を控えた今の心境をインタビューした。

【森本卓司選手インタビュー】

●はじめに、神奈川大学陸上競技部での4年間で学んだことを聞かせてください。

■チーム全体に対する責任感です。チームの中でトップの成績を出す立場になつてからは、まわりから注目されることもあったので、チームの看板を背負っ



ていると感じることもありました。●責任感といった面では、主将を務めたことの影響が大きかったですか。

■そうですね。今まで主将と言う立場に就いたことがなかったので、チームをまとめることの難しさを痛感しました。主将としては、今年度チームとして成績を残せず悔しい思いをしました。●2009年度を個人的に振り返ってみるといかがですか。

■自分自身の個人成績では満足していません。関東インカレで優勝することも出来ましたが、トラック種目で自己ベストを更新することも出来ませんでした。●個人的に好調だったこともあって、箱根駅伝では一区の力走につながったのですか。

■1区にエントリが決まると、大後監督から「周りを牽制せずに思いっきりいけ」と指示を受けました。その一言が、あの走りにつながったと思います。また、一区は他の区間と違い自分次第でレースを形成できるので、自分がレースを引っ張るつもりで序盤から積極的にいこうと考えていました。ただ後半から回りの選手にペースを上げられてきつさが出てしまいました。

●間もなく卒業を迎えますが今の心境はいかがですか？神大に入学したきっかけ、神大生としての思い出があれば聞かせていただきたいのですが。

■4年間は、本当にあっという間だった気がします。神大に入学したきっかけは、高校2年の頃、広島での合同合宿で大後監督と話せた事が大きかったですね。また、子供の頃にテレビで神大の箱根の連覇を見ていたので憧れていましたから声をかけてもらえた時は嬉しかったです。神大生としての思い出は横浜という街で生活できたことで

すね。●応援していただいたOBの皆さんにメッセージをお願いします。

■学連選抜チームでの出場になってしまいました。が、「神大・森本頑張れ！」と沿道から温かい声援をかけていただいたことに感謝をしています。自分の力になりました。応援ありがとうございます。

●最後に、後輩へメッセージ、自身の今後について一言をお願いします。

■自分の目標としては、4月から社会人として新たな競技生活が始まります。そのレベルにいち早くついていき、世界大会やオリンピックに出場できるように頑張りたいと思います。後輩には中途半端にならず、目の前のこと一つ一つに一生懸命取り組んでもらいたいと思います。

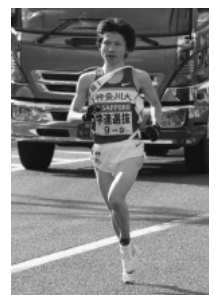
【染谷和則選手インタビュー】

●早速ですが、2010年の箱根駅伝を走った感想を聞かせていただきたいのですが。

■予選会敗退当初は、チームとして本戦に出られないことにショックを受けました。また、自分自身も箱根駅伝を競技生活最後の目標にしていたので、本当にショックを受けました。そんななか、学連選抜チームとして出場が出来る、すごく嬉しかったです。自分の競技人生に後悔の無いよう、また今まで自分やチームを応援し、支えてくれた方々へ感謝の気持ちを持って走りました。

●去年は1区、今年は9区を走りましたが、違いはありましたか。

■最初は9区を走ることにな不安がありました。1区は集団走になることが多いのですが、9区はまわりに他大の選手がいるとは限らないので、自分のペー



スでレース展開しなければならず、やりづらいつ感じる部分もありました。実際に9区を走り、神大の地元・横浜で「神大・染谷！」大声援を背に走ることが出来、自分の最後のレースがこの場所で良かったと思います。

●神奈川大学に入ったきっかけや入学してよかった事はどんなことですか。

■入学のきっかけは、大後監督と出会ったことです。また、入学して良かったことは、多くの人に支えられて学生生活を送れたことです。宮陵会の奨学金をいただいていることもその一つです。この奨学金がなければ有意義な学生生活を送ることが出来なかったかもしれせん。本当にこの4年間自分を支えてくれた方々に感謝しています。

●学生としての思い出はありますか。

■一番の思い出は、やはり部活を通して気のおけない仲間を得たことですね。

●4月から社会人となりますが目標はありますか。

■思い通りにいかない時でも、堂々と胸を張って歩んでいきたいと思えます。また、陸上競技部のOBとして後輩を見守っていきたいです。来年こそ予選会を勝ち上がって欲しいと思います。

●最後に神奈川大学のOBの皆さんへ一言お願いします。

■競技人生最後となった、箱根駅伝での横浜―東神奈川間の声援は一生忘れません。また4年間温かい応援をしていただき感謝しています。これから後輩たちに温かいご声援をお願いします。

七大陸最高峰制覇の旅を終えて

—憧れの大地、南極に立ちて—

先ずは12月21日(月)午後4時44分(チリ時間)南極大陸最高峰ビンソン・マシフ峰(4892m)に、私を始め、田中登攀隊長、宮守隊員、現役鈴木隊員が無事登頂し、神大の御旗「KU旗」を絶頂に翻らせ、単独大学によるセブンサミッツ初制覇を達成したことをご報告致します。

思えばアコンカグア遠征から丸7年、よくここまで来たものだ感慨深いものが脳裏を過りました。もしかしたら「エベレストと南極は無理かな」と一抹の不安を抱きながらも、行きがかり上「必ず学生と私一人でも達成します」と公言したことを思い出したからです。

新しい千年紀を迎えた2000年、元乗組員達(OB会)が目当てにしたりしたのは、流れる時の中で時代という大きなうねりに人(部員)・物(装備)・金(活動資金)の全てを失い、今にも難破沈没寸前で波間に漂う「山岳部」でした。その余りにも無残な姿に驚愕足震え見るに忍びなく立ち上がったのが中堅OB達によるOB会再編成と現役支援体制再構築を中心とする復興計画でした。一抹の光明の見えない中で再出発ではありましたが、ひとり二人と部員が入部して様変わり、後継者育成をと多くの賛助の声高まる中で誕生したのが「七大陸最高峰制覇

いわゆるセブンサミッツ制覇で、若者に夢の種を播くプロジェクト「夢抱き夢育み 夢実現」する夢実現計画です。これに「建学精神 質実剛健 積極進取」をコラボレーションして大学創立八〇周年をお祝いする事業としてスタートした次第です。

私の尊敬する憧れの人に、探検家アーネスト・シャクルトン卿がいます。

彼は南極横断の旅でその船エンデューランス号を氷に閉じ込められてウエツデル海で難破破壊され、過酷な氷上と海上千数百キロ旅の果てにエレファント島へ、そこに仲間を置き手漕ぎボートで一縷の希望を描いてサウスジョージア島へ2000キロの旅、さらには洋上の山脈横断、捕鯨基地に辿り着いて船を借りエレファント島への仲間救出劇と息を呑む迫真の冒険行やってのけた人です。数度の南極行で一度も成功せず、しかしながら犠牲者も出さず大英帝国の人々から称賛を浴び、女王陛下から「サー」の称号を得た唯一の人です。そんな彼の隊員募集の刺激的なキャッチには5000人が応募して屈強の冒険家25名が選ばれ冒険行を共にしたといわれます。

MEN WANTED for Hazardous journey. Small wages, bitter cold, long months of complete darkness, constant danger, safe return doubtful, Honor and recognition in case of success.....

求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保証なし。ただし成功の暁には名誉と賞賛を得る.....

アーネスト・シャクルトンサムエル・ウルマンの「青春」という詩の一節に、「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくるといふ」行がある。一介のサラリーマン・学生であろうと『情熱と信念』さえあれば「青春は心のありよ

う」と駆け抜けた165000キロの長大な旅は、OBと賛助者達の「夢の共有」、大きな夢をみんなで分ち合い、倦まず弛まずしつかりと一つずつ確実に実現することで大きく花開いたのだと考えます。

このプロジェクトで現役部員に夢の種を播き、ただ一人宮守健太君だけが七つの頂きに足跡を残すことが出来ました。最難関チヨモランマでは死線を乗り越えての快挙です。

この10年、限りある命の中で色々なことを学ぶ七大陸の旅でした。人との出会いと別れ、文化遺産や文明とのふれあい、そして小さな地球がひとつの

星であることの実感と環境汚染問題。移ろう価値観や人間模様の織り成す大小様々な曼陀羅模様を、そして失った指、その代償の多寡は何れ時間が解決してくれるかと思つています。何故なら「shall return」あの時もう一度挑戦しようかと心に誓ったからです。

最期になりますが、ご後援、ご協賛、賛助募金を頂きました大学関係を始め多くの企業、団体、篤志家の皆様はこの紙面を借りて厚くお礼申しあげます。

神奈川大学体育会山岳部監督
遠征隊長 落合 正 治



▲トレーニング



▲パトリオットヒルズ着



▲ビンソン頂上



▲ビンソンBC帰着

新聞記事より神大関連注目記事（抜粋）

地元紙などに掲載された記事を抜粋してみました。よくよく見ると結構神大関係記事が掲載されています（一部転載）。スポーツ大会でのビッグニュースの中で粘りつよい活動を認められてという地道なニュースもあります。いろいろな場所で行っている方々の活躍が報じられて勇気が湧いてきます。今後も記事をひろっていきます。地方紙での紹介記事などありましたら事務局までFAXなどでおしえて下さい。

それでは最近の注目記事から

■人をつくる―神奈川大学物語

神奈川新聞に連載（全20回）

以下タイトルのみ記します

- 1／六角橋商店街
街挙げ花嫁行列祝う
- 2／建学・米田吉盛 1
苦学の中で志立てる
- 3／建学・米田吉盛 2
協力者を得て横浜で
- 4／建学・米田吉盛 3
横専が六角橋に移転
- 5／建学・米田吉盛 4
地方入試と給費発案
- 6／戦争（上）・工学3学科
技術者養成へ増設
- 7／戦争（下）学徒出陣
在校生に見送られ
- 8／新時代（上）・再出発

生氣あふれる顔・顔

9／新時代（中）民主主義

若手8人が所見提出

10／新時代（下）大学名争奪

三つ巴に米田が断

11／発展（上）・新時代

貿易担う外国語学部

12／発展（中）・モダニズム

建設ラッシュに沸く

13／発展（下）・大学紛争

米空母めぐり衝突

14／学生・箱根駅伝2連覇

やっと終わった

15／学生・北京五輪

ロンドンへ練習重ね

16／貢献（上）・日本常民文化研究所

世界への発信拠点に

17／貢献（下）・創立以来、連続と

増嶋から多彩な人材

18／未来（上）・

湘南ひらつかキャンパス

冬の時代へ打つ先手

19／未来（下）

湘南ひらつかキャンパス

学生の成長させえ20年

20／中島三千男インタビュー

100周年へ課題実行

「人をつくる 神奈川大学物語」

神奈川新聞社編集局編

出版・神奈川新聞社

定価：一、二〇〇円

全国の書店で購入できます

■日本経済新聞

新社長

イーシステム 田原哲郎 氏

神奈川大工卒（昭和46）

■日刊工業新聞

「中小企業の変革と危機管理」として

小論文連載

小淵昌夫 氏

アジア太平洋開発型企業研究所

長・

日本危機管理学会常任理事

神奈川大第2経済卒（昭和42）

■日本経済新聞

私の履歴書

篠原三代平（一橋大名誉教授）

第4回

大熊信行

神奈川大教授を紹介

生涯の師と仰ぐ

タイトル 心に響いた「経済の本質」

生活に根ざした理論に触れる

日刊工業新聞 22・2・25

「黄金ルキーを探せ」



一企業の人材採用戦略

西 精工(株)(徳島県徳島市)
西 泰宏社長(昭63経済卒)
ナット、ファスナーなど製造販売
従業員236名

「経営理念を共有できるかに尽きる。最終面接は一人に約1時間かけてじっくりやります。良いモノを作ってお客様に喜ばれ、しっかりもうけること、そして本業でない部分でも人の役に立てることを思える人物であるかどうかを重視しています」
採用についてのインタビューに氏は答えている。「モノづくりは人づくり」そのものであるとも。

■日刊工業新聞 22・1・22

「改革に挑む」大学 この人に聞く
神奈川大学理事事務局長 小林孝吉氏
経営安定化へ知財戦略重視
連携型研究に軸足

「大学の知財積極的に活用してほしい。多少のリスクが伴っても大学とともに技術を育てることを優先してもらいたい。一方大学も保有する研究シリーズをもっと外部にアピールする必要がある」

■日刊工業新聞 21・12・3

エマルジョン燃料 実証実験開始
神奈川大 田嶋和夫教授開発の工場
排出の廃油を用いたエマルジョン

(乳濁液)燃料の実用化に向けた実証実験を開始し2010・4月実用化を目指す。

■日刊工業新聞 21・11・20

ナカ工業社長 樋口忠喜(ひぐちただき)氏 (昭42経済卒)
階段用手すりやすべり止めなどバリ
アフリー製品を手がける。
「いいモノが必ず売れるとは限らない」と自らを戒め「いいモノだと伝える営業力がそれを左右する」と。
そして「営業とは人とのつながりがすべて」という。

■日本経済新聞 21・12・7

広島電鉄社長
大田哲哉(おおたてつや)氏
(昭38電気卒)

広島市を拠点に路面電車やバスを運行する広島電鉄は雇用形態をすべて一般正社員に統一し、総コストの増加(一部賃下げもあり)もあつたが、労使が痛みを分かち合い、同じ仕事を
する社員間の格差や契約社員の将来不安の解消に踏み出した。

太田哲哉社長は「全国でもまれに見る改革で社内の一休感が強まった」と満足げた。

広島電鉄労組に「今回の取り組みを学びたい」と研修・視察希望が相次いでいる。

■日刊工業新聞 22・1・27

神奈川大が低分子レジスト
22ナノ回路パターン作成
西久保忠臣教授

神奈川大学の西久保忠臣教授はEUV(極端紫外線)露光装置向けの低分子フォトリジストを完成、22ナノメートル(ナノは10億分の1)の回路パターンを作成することに成功した。

■日本経済新聞 22・2・4

学生団体(ゼミ・グループ) 神大・貿易「菅原ゼミ」2位

日経TESTは知識の分量やレベルを測るだけでなく、その知識を活用し、活かす力(知力)がどの位あり
実社会でほんとうに役立つ「総合的ビジネス力」を客観的に測定する試験です。
今回は21大学49ゼミから70チーム456名参加した。第1位は前回に続いて早稲田大学の熊谷ゼミ。本学菅原ゼミは初の第2位。

■毎日新聞 22・2・27

神奈川大の中島三千男学長
「蜂ろっそく」をともす

「世界で一つの蜂ろっそく」
中島学長は大学構内にできたニホンミツバチの巣を観察し続け、巣の蜂ろっから玉川大ミツバチ科学研究セ

ンター吉田忠晴教授の助けを借り30グラムのろうそくを作った。
職員誕生日に点灯し喜ばれたという。

■岩手新聞 21・10・16

本田敏秋氏遠野市長に再選(3期目)
(昭45法卒)

本田氏は「農業・畜産業と商工業、観光振興による雇用の確保と創出が最優先課題。これまでどおり市民と誠実に対話を重ね、共に考え、悩みながら遠野を元気にしていきたい」と抱負を語った。

■山陽新聞 21・6・26

ヨコハマの金メダル
速水史朗氏 (昭20横専入学)

彫刻家・速水史朗氏は戦後の荒廃した横浜を離れ(横浜専門学校より転校)四国徳島に帰る。だがヨコハマが忘れられず、その後も青春がいっぱい詰まった街横浜から彫刻の仕事もまいこみ嬉しい限りだ。

横浜開港150年記念の世界卓球選手権横浜大会のメダル制作、遠い昔になるが横浜専門学校が神奈川大学となりその玄関へ速水氏制作による石彫が置かれた。想い出は尽きない。